

宗教史の縁起性と啓示性

——その識別から還元までの多次元的時間について——

田 中 か の 子

比較は、二つ以上の物事を認識・区別して相違点や共通点を見出すという人為的な仕分け作業に始まり、比較以前の、あるがままの物事へ立ち戻ろうとする時点において、一応の終わりをみる。

この、識別→比較→還元という思考プロセスは、諸々の事象を分析・総合するための「時間」であるにとどまらず、事象それぞれの性質に即して流れる固有の「時間」を識別・体験する「時間」ともなる。つまり、比較作業にかかる「時間」は、比較対照が多様化すればそれだけ「多次元的」になり、作業者の「時間」感覚は豊かになってゆく。本稿も、限られた紙数という「空間」のなかでそれを実験する「時間」研究であり、比較宗教学の宗教史的論考に終わるものではない。

一 「預言者の宗教」と「覚者の宗教」の識別

——八宗教の選択

この世界に流れる時間を人類は様々な費やしてきた。そこからまず「宗教史」の時間を切り取り、さらに、或る諸宗教の歴史を系統的に選り出して配列するという限定的作業。それは、一宗教の発祥・成立・展開や、諸宗教間の歴史的連関を示す「宗教史的時間」と、各宗教の世界観にもとづく「宗教的時間」の識別をも可能にしたがら、「多次元的時間」の認識にいざなう恰好の一例となるであろう。そのためにこれから試みるのは、唯一神の意志にしたがう「預言者の宗教」（ゾロアスター教、ユダヤ教、キリスト教、イスラーム）と、業報輪廻の理法にもとづく「覚者の宗教」（ヒンドゥー教、ジャイナ教、仏教、シーク教）の識別・

対比である。前者は、神からの一方的な意志伝達（啓示）を受けた人間の使命遂行という任務に起因する。いつ、どこで、誰にそれが起こるのかは、神のみぞ知る。その不可思議・不可測な啓示現象を重視する場合は「啓示宗教」と呼ぶ。みずから志願して、あるいは職業として預言者となった事例は、含まれていない。対する後者は、真実の追究や衆生の救済などを目指す瞑想修行に起因し、その究極的到達点において覚った内容の開示を目的とする。業に因る輪廻を苦と観て、そこからの解脱をはかるための智慧を修得した覚者は、インド思想の共有する理想の人間像。何度も生まれ変わることに期待感を込めて説かれた転生思想とは異なり、できるものなら今生で覚って迷いの生存を終息させたいと切望する。この特徴ある思想的共通項を踏まえて「インド宗教」もしくは「インド諸宗派」といった呼び方をすることもできる。——とありあえずは、以上のごとき二つのグループを作ってみる。そうするといかにも両者を分離させたかのようだが、実際にはどの宗教も「宗教史的時間」を形成・共有してきたし、「宗教的時間」もその過程で進行している。その事実をどのように示すか。例えば、次のような方法が考えられるであろう。

二 宗教史の「縁起性」と「啓示性」

あらゆる物事が因や縁となり相依って、ある事象を完全に引き起こす、神の意志などが一切介入しない自然的時間。それを積極

的に活かして覚ろうとする人間に生き方を説く深信因果の仏教に代表される「縁起」思想。それは、刻一刻と変化してやまない万象と向き合う実践倫理的時間論を基礎にしている。「縁起」の理法に即しておのずから流れる時間は無始無終であるから、一切衆生が解脱し終えたとしても止むことはない。他方、「啓示」思想は、世界の歴史に神の瞬間的創造行為の持続を観る神学的時間論へと行き着く。何一つとして自然に生起した事象はないと観るから、万象に神の意志を観る人間の生き方が望まれる。神がいつこの歴史的時間を終わらせるのか予測のつかない有限的時間である。

宗教用語としての「縁起」と「啓示」は、このように次元の異なる「宗教的時間」を対比させる。そこから離脱して「宗教史的時間」へと意識を転ずるためには、「仏教的な読みの「えんぎしょう」ではない」「縁起性」（先行・並行・後続する他宗教との相対性、民族的・言語的・社会的環境との相関性など）と「啓示性」（ある時と場所で特定の人物に起こる特殊な体験とその実践的応用）が「預言者の宗教」と「覚者の宗教」のどちらにも認められるという事実を指摘する必要がある。それには、各宗教の生成過程を「因→縁→果」に識別して列ね、一覧して比較する作業が役立つであろう（「一覧表」とその註を参照）。点線で仕切ったのは、それが仮設的なものにすぎず、決して往き来のできない壁ではないからである。「仕切り」は、人間の認識能力に「限界」があることを示している。

三 「宗教史的時間」の「空間」的把握

——「一覽表」の活用

(1)「因(縁)」は、預言者や覚者となるべき人物に焦点を当てた個人的要因である。啓示や覚りに到るまでの生い立ち・生き方・考え方、および使命の自覚などを指す。

(2)「縁(因)」は、当時の社会状況にみられる問題点(主として、戦乱や身分差別に因る弱者の苦しみ)、他宗教との思想闘争、他民族との対立抗争・交流・混血などを包括する社会的要因である。(1)が対自的課題の追究だとすれば、(2)は対他的問題との直面である。

(3)「果」は、一回的・個別的・最後の召命体験および啓示体験、不退轉の正覚、詩的直観としての天啓などによって熟成の時機を迎えた一宗教の基本型(根本思想とその実践方法)をあらわす。それは以後の歴史的展開に決定的な影響を及ぼしつつ、世々に立ち帰りを促す原点となる。時代を超えて存続してゆく宗教的特質とでもいうべきものである。

(4)つまり、(1)や(2)の「縁起性」は(3)の「啓示性」が発現するために必要な条件を整え、「啓示性」はその「縁起性」において顕在化してゆくという不即不離の相互関係がみられるのである。ここでの「縁起」と「啓示」は、決して矛盾・対立するものではない。

(5)たんなる「因果性」とは異なり、ここにみられる「因縁・生起性」は、あらゆる結果を生じさせる可能性にみちた条件(縁)が間接原因として、直接原因(因)とその結果(果)に作用するという状況変化のなりゆき(相依性)を表現する。いわゆる決定論的な因果律に縛られることなく、歴史現象の真実を柔軟に捉えることができる。相依的であるがゆえに、「因」と「縁」の内容には互換性が認められる。例えば、イスラーム以前の時代における部族闘争や「表」にはないが、カアバ神殿を拠点とする多神教の退廃などから生じた社会問題を「因」とすれば、その解決を断行した預言者ムハンマドの生い立ちが「縁」となり、一神教の成立という「果」につながるが、この「縁」を「因」とみなし、「因」としたものを「縁」と考えても、同一の「果」に達する。ただ、ユダヤ教の発祥は神の選民を、ヒンドゥー教の帰拠するヴェーダ聖典は詩仙の靈感(「天啓」と呼ばれる詩的直観)を動かした第一原因としており、その背後に何らかの社会的な要請を読み取ることはできない。遊牧民の族長アブラム(「高貴なる父」)をアブラハム(「諸国民の父」と命名し、その子孫に啓示を下していった神の意図は測りがたく、神秘的である。また、天啓を受けて詩作した往昔の聖者たちは、周囲の社会状況に関心を向けるよりは、天界の神々をいかに勧請するかという祭儀上の知識^{グナナ}を追究していった。ユダヤ教とヒンドゥー教が、後続する諸宗教に影響を与えた普遍的な思想をも生み出しながら、なお民族

性の強い宗教とみなされてきた理由を、この「因」と「縁」の不可逆性に観ることができる。

(6)各宗教の「因―縁―果」を示すヨコ軸から今度は、これら諸宗教を貫くタテ軸に眼を移してみよう。ここにも見る宗教の配列は、「預言者の宗教」では最古層に属するゾロアスター教から順に始まる。その終末思想を捕囚民時代に取り込んだとみられるユダヤ教はキリスト教の母体となり、父祖アブラハムの一神教はイスラーム成立の理念となった。キリスト教は預言者イエスの復活信仰を起点とするが、神殿祭儀を中心とする祭司のユダヤ教に対する批判精神を主動因としている。イスラームも、ユダヤ教やキリスト教の批判なくしては成立しえなかったであろう。これら三つは、セム語族の宗教としてまとまっている。

イスラームから学びつつも、ヒンドゥー教的背景をもつシーク教は、輪廻世界を統括する唯一神^{イブ・オウラフム}を説く。神の意志で持続する時間と、業報輪廻に因り継続する時間が渾然としているのが特徴。ヒンドゥー教は、原インド・イラン語族の時代に遡れば、ゾロアスター教と同源である。唯一神アフラ・マズダーは、正義を具現化する宇宙の法則^{アシュラ}を創造してから、それにみずからも従った。それは、万有の運行を統べる天則^{ダタ}のはたらきを説く聖典ヴェーダの根本思想とつながっている。一神教とはいえ、立法者としての神が遵法者としての模範を示し、万有を法支配に委ねている点、さらには、イラン古来の善き神々を否定せずに、神の作品・配下と

して統率する点においてゾロアスター教は、セム語族の一神教とは一線を画する「原インド・イラン語族起源の一神教」である。そのように古い起源をもつヒンドゥー教は祭式万能の階級社会を基盤とするが、ウパニシャッド哲学（ヴェーダーンタ）の時代には既に、梵我一如の体得に因る輪廻解脱が説かれ、祭式に抛らずとも救われる様々な解脱道の可能性があらわれていた。自由思想を唱える諸宗派の生まれる素地をつくったのである。これがなければ、ジャイナ教や仏教は成立しえなかったであろう。あるいはいま知られているのは別のかたちを取っていたかもしれない。

(7)「一覽表」という空間的形式をかりて俯瞰するこれら八つの宗教は、互いに異なる個性を分かちもつ。各宗教は他宗教からの影響を否定して、独立自存を主張する立場にある。しかし諸宗教間の歴史的相関は、先行・並行・後続する他宗教との相対性なくしては一宗教の存続・展開しえぬ事実を証明している。⁽³⁾いかなる個性も、対他的に仕上げられる。

(8)そうだとすれば、「縁起性」の及ぶ範囲（現象世界）を超えた永遠不滅の実体として崇拜を受ける唯一神を「縁起性」のなかでいかに捉えるべきかという疑問も生じてこよう。

いま一つの答え方としては、人間世界に関与してくる神の意志が個人的かつ社会的なレヴェルで顕現するその時点から始まる「縁起的」なはたらきに注目せよと言うことである。どんなに超自然的な啓示現象も、その意味を自分なりに咀嚼して伝達に努め

る当の人間がいなければ影響力をもつことはできない。神の歴史計画を推進し、固有の思想や文化を形成する実際の担い手である人間どうしの相互作用は、まさに「縁起的」な関わりといえる。

もう一つは、先の神学的視点とは違い、唯一神という観念をもとからある実体として考えるのではなく、多神教的背景から徐々に形を成していった経過（「唯一神」の生成過程）を指摘する宗教史的視点から答えることである。これは「預言者の宗教」とシーク教について当てはまる。特にシーク教の神は、まさに因縁生起の渦中というべき輪廻世界に関与する点で、「縁起性」における「啓示性」の顕現を示す好例である。

四 人間の脳裡に蓄積した 「多次元的時間」の還元

もとより一頁を占めるにすぎない「一覧表」の空間であらわせる内容はごく限られており、諸宗教の歴史をめぐる「多因多果」の状況を捉えきれものではない。「表」の作成にともなう「仕切り」は、推移と変化（動態）を特質とする「時間」をほとんどん逃してゆくようなものである。それでも、各宗教の世界に流れる「時間」と宗教間で共有される「時間」は、それらを詳らかに識別・比較する人間の脳裡に、多次元的な層をなして蓄積し、記憶にとどまる。「宗教史」の研究とは、そのような「多次元的時間」の各層を一つ一つ経歴しながら、時計の針が刻む「時間」とはま

るで違った進み方をする「時間」の多様なありかたを探りあてて作業であるといえよう。研究者の思考プロセスで扱われるいくつもの事柄に先後関係が生じるのは避けられないが、複数のデータを同時に意識しながら思考するそのやり方は、ちょうど、パソコンのスクリーンにウィンドウズを重ねながら作業するのと似ている。作業中のウィンドウを見ていても、背後で接続中のウィンドウズが常に意識されており、いつでもそのどれかに戻ることができる。これは、かの「多次元的時間」を体験する人の「時間」感覚を端的にあらわしうる恰好の例といえる。ただし、人間の脳は、操作すれば消えてしまう、ホームページの接続履歴とは異なり、一度認識した事柄はかならずどこかに記憶して容易には忘れないものである。殊に、何度も反芻したことのある重要事項は、その人の身に付いて離れない。諸宗教が憶念すべき教えの復唱を勧めるのも、それを人の心に響かせればそれだけ、理想的な境地に到達するのを早め、はかない「いのち」を救えるからである。限りある人生の「時間」も、「多次元的」に経歴すれば、永くもなろう。本稿で展開したテーマは、その参考となる事例を提供している。

そもそも、「宗教史」の「時間」を諸宗教の縁起的生成（縁起性）と啓示的存続（啓示性）に識別するという作業は、もとの不可分な状態に戻すという帰結を前提としている。それがいかなる「多次元的時間」を実現しようとも、その全過程は、我々の

	因（縁）	縁（因）	果	
ゾロアスター教	古代イランの多神教におけるマゾダー崇拝と正義の象徴・火の祭祀。 祭司ゾラスシュトラの旅立ちと世情の見聞	青銅器時代に尖鋭化した武力闘争により乱された農村の平和。 預言者に傾聴しうるカウイ王朝の寛容性	悪と闘う協働者として神々を創造・動員し、七つの属性により善を具現する唯一神アフラ・マゾダーの啓示	（唯一神の意志にしたがう） 預言者の宗教
ユダヤ教	故郷カルデアのウルからカナンに向かった族長アブラムとその子孫を選び、祝福した神の不可思議なる意志	カナン人によるバアル崇拝などに代表される農耕型の多神教との思想闘争。 先住民族やファラオとの対立抗争	シナイ山にてモーセに下された唯一神の契約（ヤハウェは、モーセの岳父エトログが奉祀する火山地方の神の呼称）	
キリスト教	イスラエルの律法と預言者の精神を見直し、父なる神と一体化したみずからを自覚するに到ったイエスの登場	神殿祭儀により貴族化した祭司の律法主義； 律法を遵守できない者・病み苦しむ者の疎外。 イエス受難の成りゆき	メシアたるべきイエスの生涯に受肉、贖罪死、復活の過程と、最後の・一回的な神との契約を 観る一派の分離・独立	
イスラーム	孤児として苦勞した末、幸福な家庭と順調な商いに恵まれ、異教徒の精神文化にも接していたムハンマドの実存	悪霊による詩人の活躍。 血縁関係に束縛されたアラブ諸部族間の闘争。 女兒の間引き。孤児や寡婦などの困窮と疎外	アラブ古来の至高神・アッラー（「神」）を呼び名とする唯一神による、最後の啓示と 信仰共同体の形成確立	
シーク教	ヒンドゥーとして瞑想に親しみ、ムスリムとの交流に学んだ在俗の教養人ナーナク自身の求道的な日常生活	四姓制度の人間差別。 祭儀や礼拝の形骸化。 ヒンドゥーとムスリムの共存・親交・軋轢。 寡婦の殉死などの悪習	ヒンドゥー教ではなくイスラームでもない、業報輪廻思想にもとづく唯一神教の、 における啓発と展開	（業報輪廻の理法にもとづく） 覚者の宗教
ヒンドゥー教	インド宗教の始源たる天則に従う万有を観た詩仙らの靈感（天啓）。 供物の煙を昇らせ神々を勧請する火の祭祀	祭司中心の階級組織化をはかる祭式万能の観念を許容する社会。 アーリヤ人の先住民族との闘争・交流・混血	アーリヤ系の祭儀宗教と輪廻解脱の哲学説に、非アーリヤ系の文化を融合させつつ、神々の一元化に向かう多神教	
ジャイナ教	苦行重視のニガンタ派に入ったヴァルダマーナの、靈魂を肉体から解放しようとする思想傾向とその実践修行	四姓制度の人間観。 王族の優勢に乗じて活発化した自由思想。 諸聖者崇敬の社会慣習。 供養や沐浴による浄罪	苦行により、本来清浄な靈魂から業物質を払拭する解脱道を完成し、ジナ（勝者）と成ったヴァルダマーナの教説	
仏教	誕生後すぐに母を亡くし、生老病死の苦を自覚する年齢に至り、瞑想を深めていったゴータマの実践修行。故国滅亡の兆し。	（ジャイナ教の同項目は、ここでも通用。） 常住不変の実体（我）を探究する形而上学（無我説の思想的背景）	苦行を捨て、誰もが心の救いを得るための確実な生き方を悟り、ブッダ（覚者）と成ったゴータマの教説	

※ この一覧表は、「預言者の宗教」と「覚者の宗教」のそれぞれに有りうべき縁起性と啓示性の識別を試み、還元してゆくための仮説的な空間である。

「現在」とも交錯しながら、もとより一本の流れをなしているのである。「識別→比較→還元」を繰り返せばそれだけ物事の理解も深まり、「時間」感覚も冴えてくる。

「いま」に潜む多次元性は、人間の主体的な「時間」との取り組みによってこそ知られるのではないか。世界の諸宗教が説き教えるのも、有意義な「時間」の過ごし方であるかと思われる。

(1) ビュタゴラス、プラトン、エンペドクレスなどの唱えた哲学説を指す。

(2) 1. 叡智を象徴する最高神。2. 同じアーリア系のインド人が崇める火は、天則の象徴ではない。しかし、Vedic: ita と Avestan: ista は同源の至高価値である。3. 悪霊崇拜者と結託した父との決別。4. 「傾聴」自体、「崇拜に値する者」として既に神格化されていた。5. 宮廷の呪術師たちに勝利した預言者の優遇。6. 一神教としての弁証法。7. 動かしたい第一原因。8. 神々の存在を初めてから否定できなかった過程。9. 神の山ホレブにおけるモーセの召命体験。10. 宣教を決意して公生涯に入った時点。11. 十字架上の死を成就させた敵対者と同行者の言動。12. 「新約」。13. ユダヤ教団、イエスを待望のメシアと信じる一派を永久追放。14. 主としてユダヤ教徒とキリスト教徒。15. 神の霊の抛り代となりうる生存。16. 妖霊の憑霊。17. 預言者ムハンマド晩年の使命。18. 幼少時よりグルと成る素養に恵まれていた。19. グル＝ナーナクが創始した無料奉仕による万人平等の会食は、これに対抗した社会活動。20. 特に、神との一体化を志す bhaktia と sūtr の交流。21. 業報輪廻を支配する唯一神。22. 瞑想に因る智慧を求める自発的行為。神から

の一方的な意志伝達（啓示）と区別して「啓発」という。23. 民全体に関わる伝達内容をもつ預言と異なり、祭祀者専有の知識を啓発、天則の万有における作用とその総和を dhātma と呼ぶ。24. 祭司の權威に抗わず信順した民族性。25. 同じアーリア系のイラン人は、これを一神教に発展させた。26. Rig-Veda 1:164:46 以来の一元論。27. 尊称 (Mahatma) ではない。本名。他方、ゴータマという呼称は一族の姓。28. 四住期の人生観が出家遍歴を許容。ゴータマの場合も同様。29. 制度改革ではなく、人間性向上の自己改革を説くのは、仏教と共通。30. 為政者による諸宗派の庇護と、有徳の修行者に布施・聴聞して功德を積む在家倫理。31. とりわけ、供饗の殺生を非難。自己浄化は饗礼によらず行為によると説く。32. 成道の瞬間に、本人の思弁も追いつかない迅速で神秘的な智慧の発現を観れば、「啓示的」な体験といえるであろう。ブッダの場合も同様。ジナやブッダは覚れば誰でも成れるとはいえず、その歴史的登場は一回の価値を有し、「啓示的」である。だがやはり、「覚り」は人間の到達点であつて、神からの賜物ではない。33. 今生での心解脱（生前解脱・現法涅槃）を本旨とする縁起説。

(3) 詳細は、拙著『比較宗教学——「いのち」の探究——』北樹出版、二〇〇四年、六四頁をめぐる第2章参照。

(4) 道元禪師の『正法眼蔵』（『有時』）にいう「経歴」は、修證一如の時間（過去・現在・未来の三世）を往來して「発心・修行・菩提・涅槃」をつねに現成することである。

(5) たんなる「履歴」と註(4)のいう「経歴」との違いをここにみるこ

（たなか・かのこ、比較宗教学・

インド精神文化史、駒澤大学非常勤講師）